

因島大浜周辺の魚 —

同海域に於ける一本釣りから

山本 晋

一次産業である水産業は、第2次大戦後かなり経ってから「獲る漁業から作る漁業へ」の転換がはかられた。これは諸般の事情から避けられない問題で、今後益々その具体化が要求されるだろう。いわゆる栽培漁業(aquaculture)がそれで、農業同様に、これには種々の技術を要し、かつての漁業従事者にとってはまさに隔世の感があるであろう。

自然の海では、海棲生物は現在でも自然の摂理に基づいて生存生活を行っている筈である。著者は永年、因島大浜周辺で釣りを趣味として楽しんできた。魚の学問には全くの素人であるが、因島大浜周辺海域での釣対象魚や過去30~40年間に魚種や魚群がどのように変遷したかについて、思いつくままに述べることにする。

1) 因島大浜周辺海域の自然条件: 著者が釣り対象としている大浜周辺海域とは、糸崎港から細の洲、布刈瀬戸、沖のカタソワ、防地の洲、当木島、百貫島、豊島、津波島を結ぶ海域である。この海域の海底は砂(S)、泥(M)、礫(G)、貝殻(Sh)及び岩(R)の単在或は複合から成っている。この中でS、Shが最も広く、M、Shがこれに次ぎ、この両者で同海域の80%以上を占める(附図参照)。

この海域はいわゆる浅海で、海域の80%までが水深15~16m以下である。しかし水深20~30mの所や50mに達する淵も3、4ヶ所在る。

Fishes in the Sea along the Coast of Ohama, Innoshima Island: From the Fishing Experiences in the Aera.

Susumu Yamamoto (Research Institute of Marine Biore-sources, Fukuyama University, Ohama-cho, Innoshima, Hiroshima 722-21, Japan)

干満の差は5月初旬の最低のときで1.1m、1月初旬の最大のときは3.8mに及ぶ。

水温は、内海であるので、大気温に影響され、5月から水温は高まり、8、9月には28℃に達するが、12月末から1月初旬には14℃以下（魚の動きが鈍くなる。）、さらに2月末から3月初めには6℃にもなることがある。それ以後5月に入って14℃以上に回復する。

2) 魚種・魚群の変遷: 30年程前には当地方で「差し網」、或は「押し網」と呼んだ漁法が盛んに行われていた。漁具は縦0.5m、横1.5mの網を木枠に取り付けただけの網である。夏から秋にかけて夕刻の干潮時に、瀬に生えている“あま藻”の中を、膝から腰位まで海水につかりながら、その網を押し歩くと、潜んでいる小魚、エビなどがおもしろい程網にかかった。主な獲物としては、シタヒラメ、ワタリガニ(ガザミ)、モエビ、ギンポ、アイナメ、マコガレイ、オコゼ、さらにタツノオトシゴ、ヨウジウオ等であった。

興味あることは、その頃「カニ踏み」と呼んだカニ獲り漁法もあって、秋の干潮時(午後3:00から6:00頃まで)に底(泥)に生えている藻場を歩き回ると、足の裏に堅く感じられるものは例外なく「ガザミ」であった。2時間も続ければでバケツに半分も獲れた。

コウイカの群が産卵のため接近する5月には、朝出勤前に船出して20~30匹(バケツに略々一杯)が獲れ、台所をうるほした。イイダコ、マコガレイやアナゴもおもしろい程獲れたし、また櫓船を操っているとトビウオが飛び込んで来たりした。

昭和40年代になって上述の魚獲法は次第に減りはじめ、現在では、もはやみることができない。かつて南風に帆を張り、ゆっくりと横行しながら小エビを捕獲する「うたせ網漁」も現在ではみられない。

鉄工団地の操業開始や経済成長に伴う生活様式の変化と環境との因果関係については触れないことにするが、当地方の海域では現在、魚は急減し、釣り仲間の間でイイダコやコウイカの釣りが話題に上ることはない。トビウオの姿がもなく、漁火漁も姿を消してしまった。群を作って悠々と遊泳していたスナメ

りも最近では全く訪れなくなった。

3) 因島大浜周辺海域の当今の魚について：当海域は浅海で、その自然条件等については既に述べたが、そのことから大凡推察されるように、当海域には住みつく魚の種類は極めて少ない。水温が14℃以下になると多くの魚は深場へ移動するか、摂餌意欲が低下する。従って当海域では12月下旬頃から4月初旬頃までは、一部の魚種を除いて釣りらしい釣りはできない。5月末になるとキス、シログチなどが釣れはじめ、8月まで楽しめる。その期間中は、マダイ、クロダイ、スズキ、キジハタ等も釣れるが、時期は勿論、場所が問題でさきに著者が述べた海域で可能性のある区域は極めて限られている。一方汚染に強いと云われるボラは異常な程増えており、これの釣りには事欠かない。

因島大浜周辺の海域で有名のことは、布刈海峡を挟んで対岸の向島海岸に5月になると、トラフグが産卵のため集まってくることである。かつてはこのトラフグ漁に百船以上の漁船が方々から集まって来た。現在でも同時期にそこそこの漁船が集まるので、産卵に来るトラフグは少しはいると思われる。なお海水の汚染防止が奏効してきたためと思われるが、沖合に“あま藻”が認められるようになり、また夏から秋にかけて八重子島相川海岸では汐干刈が行われるようになった。また或る地域では海底のヘドロ化が止まったようでアナダコが獲れはじめている。

4) 因島大浜周辺での釣り経験から：広島大学学長、そして文部大臣になられた故森戸辰男氏の揮ごうで「釣而不網」としたための色紙を頂戴している。私の好きな語である。

漁師は、魚を釣れるから釣るのではなく、釣れるように仕向けて釣るのを本領とする。よい釣りをするためには、それなりに条件を整えなくてはならない。しかし昭和40年頃までと較べて魚影が少なくなった昨今、安定した釣果を挙げるためには、次の条件が揃う必要があると考えている。

(i) 釣りの条件—ア) まず海底の様子を知ること：海底を知るといことは即ち魚の居場所を知ることである。岩礁域、

砂泥域、砂礫域・・・等魚によってそれぞれ住む場所が決まる。大ざっぱには、海図を参考にすればよいが、やはり実際に底を探ってみなければ、確かな釣り場とはなり得ない。広い海のことであるから、釣り場の選定には何年もの経験がものを云う。

イ) 海流と汐差を考慮すること：明石沖あたりを界に当海域では、干き潮の場合は西へ、満ち潮の場合は東へ流れる。しかし、どこでもそうとは簡単に云えない。沿岸の湾曲や海底の起伏によって、極めて複雑な流れを見せる。また大潮と小潮ではその流れの速さや方向も変わる。魚たちはこの流れによって移動する。

ウ) 気象状況の確認：釣り日記への記入項目の一つとして風、雨、霧、水温等の気象状況が挙っている。魚たちの摂餌欲と気象環境との間には深い相関関係があると思うが、未だによく分らない。しかし、こんなことがあった。6月中旬のある雷雨の日、著者はベラ釣りに出ている。近くで蛸釣りをしていた漁師が近づいてきて「兄さん、今日は喰うまゝが、わしゃもう帰るで・・・。こんなに雷が鳴っちゃ蛸も喰わんよ・・・。」ベラもさっぱりだった。

エ) 餌と仕掛：道具や仕掛に凝るのも趣味の一つかも知れないが、要は釣り対象の魚にあった道具を使うことである。著者は既製の仕掛を使うことはない。また魚は、季節や時刻によって食べ物が変わることも知っておかなくてはならない。釣った魚の腹を開いて、どんなものを喰べていたかをみることは、釣り人として初歩的必須作業であろう。

オ) 目標の設定：「何か釣れる」ではなく、今日は「何々を釣る」ことを決めるのである。また二兎を追っては良い釣果は望めない。海底、水温、潮流、仕掛、餌等の総合条件に鑑みて釣り目的をはっきり決めてこそ、楽しい釣りとなる。

カ) その他：厳しい自然の中に生息している魚たちは、僅かな異変にも敏感に反応する。良いはずのポイントが、日によっては全く駄目なことも多い。従って、ポイントを何ヶ廻も知っておく必要がある。同好者と情報を交換しながら、次回の釣り場を選定することも大事である。

(ii) 釣り対象魚ーア) ベラ：キス、グチ等と並ぶ当地方の代表的な釣りの対象魚である。誰にでも釣れる魚であるが、口が

小さく、一気に喰いつくことが少ないので、いわゆる合わせの必要があり、上手と下手とでは、これで差がつく。砂礫、岩礁、藻場等、広範囲に生息しているが、潮流に大きく左右されるので、ポイントの選定は必ずしも容易ではない。勿論、季節によってもポイントは変わる。太陽が上がった直後から午後3時位までが釣り時間である。6月中旬から7月中旬と、9月中旬から10月中旬が最盛期である。7月下旬から8月にかけての抱卵期には喰いは遠のく。良い釣りは期待出来ないが12月中旬までは楽しめる。

イ) シロギス：海底が砂、砂泥、貝殻であれば、海岸から水深50～60mまでの海域で釣れる。群で移動するので、潮流を考慮しながらポイントを探るのがコツである。春は岩礁近くの海藻に産卵するので、4～5月頃はその辺が良い。通常、底のかけ上りを狙う。潮が止まると摂餌活動が低下し、当りも小さくなる（常時、船を動かしながら釣る。）。朝及び夕方のみずめ時が最高。ほとんど年中釣れるが、水温が14℃以下になるとやはり釣り難い。音に敏感であるので、浅瀬での釣りには注意を要する。大きいシロギスは一般に深い所か潮の動いている時に釣れるが、合わせは、いわゆる「向こう合わせ」によることが多い。

ウ) シログチ（イシモチ・ニベ）：キスと同居する魚で、釣り場の選定、釣り要領はキスと殆ど同じで良い。然し、通常水深20m以上を狙う。餌はゴカイ類が良いが、5～6cmのエビやシャコの方が食いが良い。コオジも好まれる。鉤は少し大き目のもの（流線13～15号）を使う方が良い。口が大きい上に吻が柔らかいため、小さい鉤では外れ易い。群遊する習性もキスと同じであるので、潮流を考えてポイントを決める。

エ) マダイ：当海域は浅海の上、砂泥質底が多いため、マダイ釣りの適地は少ない。しかし、水温が14℃位になると水深25～30m以上の岩礁地帯に産卵に来るので、その時期を狙う。いわゆる「さくら鯛」である。潮の変わり目が良い。しかし、6月頃までしか釣れない。最近、当地域のマダイは、かなり急に減少しつつある。「まぼろしの魚」として姿を消しかけていたコブダイやキジハタが、下道的に釣れることがある。

オ) クロダイ（チヌ）：極めて臆病で、光や音に敏感である。

貪欲で雑食性のため、比較的汚れた磯底や港岸壁底にも生息する。いろいろな釣り方があるが、濁りと臭みに感応して寄って来るので、この性質を利用した紀州釣りが比較的広く行われる（餌の貝のむきみ、或は割れた貝殻ごと鉤につけ、その周囲を蛹で臭いをつけた赤土でボール状に握り、これを静かに下ろし、海底についたら、その土だんごが割れて濁るように竿を操作し、食い付きを待つ。この釣り方は海を濁すのであまり奨められない。11月末まで釣れるが、最高の釣りは4月中旬以降のはらんだ、いわゆる「登りチヌ」を狙う。産卵直後のチヌは「麦わらチヌ」と云って猫も避けると云う。かかり釣りの場合と異なつて、流し釣りの場合は向こう合わせで、ガツンと感じたら一気に勝負する。

カ) サツパ（モーカリ、ママカリとも云う。）：水深5～15 m位で、起伏に富む地帯はよく渦を巻く。6月頃になるとサツパは、そのようなところに現れる。多分餌となるプランクトンがよく集まるからと思われる。9月頃は産卵季であるので食欲が旺盛である。カタクチイワシも同様な所に集まって来る。サツパ、カタクチイワシが集まると、これを餌とするマアジも寄って来る。まさに食物連鎖である。

サツパは疑似餌を付けた鉤（7～8本）でサビキ釣りするが、釣るのではなく、鉤に引掛けるのである。しかし、ポイントは一般に、急流でしかも狭いので、ポイントから2 mも外れると、全く釣れないこともある。数年前では船による網で獲られていたが、最近船による漁は、当地域ではみられなくなった。サツパの生息域は食物連鎖が成立するので、時には意外な釣りを経験することがある。朝5時から10時半までの間に、サツパ10 kg、30 cm級チヌ32尾、スズキ2尾を挙げたことがある。

キ) メバル、アイナメ：習性に差があるはずであるが、それらは殆ど同じ要領で釣れる。水温が18℃から10℃以下に低下する11月から1月末頃までが産卵季で、釣りにもよい。穴の多い岩礁地帯に群生して定着する。そのような場所に播餌すると、はじめ10尋位の深さから釣れていたのが、次第に群をなして浮上して来て3～4尋位のところでも、いわゆる“入れ食い”的に釣れる。魚族保存のため、心ある釣人は入り食いとなったら納竿する。夜間は比較的分散しているが趨光性があるので、

これを利用して浮き釣りする。メバルも近年当地域では少なくなった。アイナメは岩礁、テトラポットの岸底、或は礫底に生息する。動きが少ないのでかかり釣りする。アイナメと区別し難いクジメは、藻ぎわがポイントになる。

ク) その他: 秋半ばから、はらみカレイが浅瀬の藻場に産卵に来る。そこでふ化し半年位の間育ったカレイは、小型ながらもいわゆる花見カレイとって春の釣りの対象になる。晩秋には、またウマズラハギ、サヨリ、マアナゴ、マダコも当地域の欲釣りの対象になる。マボロシの魚として一時全く見られなくなったコブダイ、キジハタが最近見られるようになった。大浜周辺海域の汚染が止まったためと思われる。

おわりに—海底のヘドロ化は、徐々に改善されつつある兆しが見えるものの、心ない人たちによる廃物の海中投棄は、後をたたない。おびただしいビニールや発泡スチロール製の廃棄物が釣り場を覆い、船の航行さえをもしばしば妨害する。各地で「クリーン作戦」と称して、種々の活動を行っているが、「きれいな海」への大衆の認識はまだまだ不十分と思われる。

著者は、同好の有志と40年前の海を呼び戻したいと、困難とは思いつつも、「海をもっともっときれいに」の期待を込め、海面投棄物の「一日一物処理」の運動を細々ながら続けている。

本稿で、因島周辺の魚について長年の小さい釣り経験を述べた。同海域のここ30年の魚種の変遷と、同海域に於ける釣りについて関心のある方々に、些かなりと参考になれば幸甚である。